昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十三年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二二九号）

慈光

第二十卷　第六号

目次

教誨自誡……近角常観……(1)
愛書と求道……福島政雄……(4)
近角師著「親鸞聖人の信仰」(5)
近角先生聞記……吉田延世……(8)
疾病と信仰……麻生介……(10)
内は愚にして外は賢なり……千葉崇憲……(17)
歎異鈔第一章……花田正夫……(19)

教誨自誡

近角常観

はしがき

教誨といえば、人を教誨することなれども、その教誨をしつつある間に自らを教誨すること多かるべきなり。蓮如上人は「坊主は人をさえ勧化せられ候に、我身を勧化せぬはあさましきことなり」と仰せられたり。真実の信仰の立場より云えば、自己の信仰以外に教誨のあるべき筈なく、真実の教誨は必ず自己を教誨することとなるべし。今その信仰の立場より見たる教誨上の所感を披瀝して、自ら誡めとなすも、これ仏陀自然の法則に叶うらんと云うや。

一　信仰か道徳か

教誨を為すには信仰によるべきか、道徳によるべきかということがよく論ぜらるることであるが、これは簡単なる問題である。一言にして云えば、

「真実の信仰はかならず道徳を具す。道徳にはかならずしも真実の信仰を具せざるなり」

と云うべきである。人が真実の信仰に入れば必ず道徳はそなわるべき筈である。故に信仰をもって教誨すべきは勿論のことである。然らば道徳で教誨は出来ぬかというに、ここに大いに注意すべき点がある。即ち真実の信仰にともなうた道徳ならば、その道徳を説くことそれ自身が、すでに信仰を説きつつあることとなる。若し信仰のともなわぬ道徳を説くならば、如何ほど道徳を説きてもその道徳は感化を及ぼすことは出来ぬのである。

今日よく人の口にする、教誨は信仰によるか、道徳によるかと云う問題の意義が不明瞭である。若し信仰によらずして道徳を説くというならば、その道徳は形式の道徳である空文の道徳である。いたずらに器機的に古人の金言を反覆し、善行を縷述しても、信仰をもって説かねば、一時の興をひくのみで、これを囚人の心に植付けることが出来ぬかくの如き道徳を如何程説きても何の益もない。若し信仰より出でたる道徳を説くならば必ずしも一言一句に宗教的

言語がなくとも、道徳を説くのが、その源の信仰を説くことになる。よしんば信仰的言語を用いたりといえども、信仰そのものが生きて居らねば、あたかも信仰なき道徳と同じで、形式空文の信仰となる。この如きは、信仰的の言語を説きたるのみで真実の信仰を説くとは言われぬのである

故に教誨が信仰か、道徳かということは形式上から云うべきではない、精神上より言わねばならぬ。

信仰なしに道徳が説き得る如く考える誤解と並行したる誤解がある。それは、信仰を説くときは道徳的制裁を弛緩ならしめるように考えることである。こは甚だしき誤解である。この誤解の来る原因は、信仰は仏の大慈を説く、その仏の大慈は、罪悪の者を捨てたまわぬことを極言せねばならぬ。しかるに仏が罪悪の者を捨てたまわぬと云えば、如何に罪悪を犯すともさしつかえないと云うように誤解するからである。

そのような誤解は即ち信仰なきことを表白しておる。仏が罪悪の者を捨てたまわぬ事実あればこそ、罪悪の者が仏を信ぜざるを得ず、ひとたび仏を信ずれば仏力次第に加わりておのずから慚愧心が起り、知らず識らずの間に道徳的制裁が緊張せられるのである。

わが少き経験によるも、囚人に著しく改善の動機を興えたるの一例は耳四郎が名号を称えて、その威神力に感激して入信悔悟の人となった話であった。古来耳四郎の例の如きは、念仏を称えてもなお悪事をなすという実例にひかれたものである。むしろ悪事を為しながらも念仏を称えつつあったために非常なる仏の御恵みを蒙りて、仏力の威大なるに感激して真実の信仰に入り断然悪事を止めた事実なのである。故にその事実を説きつつある間に、現に耳四郎の如き囚人が、また耳四郎と同じく仏力を感歎するようになるのである。

かく信仰を説くのが即ち生ける道徳を説くことになるごとく、真実の道徳を説くならば、たちまち信仰に響かざるを得ぬ。ある人が、大乗戒を説いて、眼前の小皿に醤油の残るのを指して、これが殺生戒を破ったのであると言われた。これを聞いて、蓮如上人が紙片の落ちたのを拾われて仏法領のものを疎かにすると頂いて懐に入れられた事実を思い出して、事々、物々如来白毫(びやくごう)の恩賜たることを気付かして貰うて喜んだことがある。これは単に道徳を説かれたのではない、即ち信仰を説かれたのである。

我々は常に、時間を盗み、労力を盗み、名誉を盗み、多くの人の心を奪い、遂に仏法領のものを奮い、仏の御力を我が物顔に奪うものである。仏の眼より御覧になれば囚人

と我等とは違ったものでない、耳四郎と我等と異ったものでない、そして我等は慚愧心を起さぬのである。かくの如きものが、いかで囚人に懺悔心を起させることが出来よう、物を持たずして人に物を与えんとする様なものである

世に囚人の道徳と尋常人の道徳と二つあるべきはずなく信仰に囚人と教誨師の区別はない。さればこそ仏より頂くわれらの心中の信仰は、おのずから囚人の心中に宿りたもうのである。この仏の御心をありのままに披瀝するのが教誨である。信仰も仏力である、道徳も仏力である。そして他に対する教誨、すなわち自己に対する教誨である。

（求道　第四巻　第一号）

大石順教尼のことば

明治三十八年、大阪の堀江で突発した「六人斬り」事件で、ただ一人生きのびたが両手を無惨に切りおとされた芸者「妻吉」（当時十七才）は、十九才の時、旅回り一座に加えられて仙台へ巡業に出かけて旅館に泊ったさい、籠の中のカナリヤ親子の生活を見て、そこに大きな教をうけたその時の手記に

「手のないことが何故悲しかろう、不具者が何だ。私にはカナリヤと同じ口があるではないか……私は初めて心の眼が大さく開いたような気がしました」

とある。

口に筆を取りて書けよと教えたる
　　鳥こそわれの師にてありけれ

二十四才で画家と結婚し一男一女をあげたけれど、主人の病を十二分に看護のできぬのを恥じ、かねての宿願である出家のために三十七才で離別した。

その後観音経を三七・二十一日の満願の日に写経しおえて順教の安名を貰い出家した。

罪ふかくあわす手もなき身を持ちて
　　大師のみ子となるぞ嬉しき

とは、その悦びの歌である。また

黒髪を落してむこう朝鏡うつるおもわにおもう亡き母

とも詠じている。昭和三十年に尼の書いた般若心経が日展に入選した時、吉井勇氏は、

そのむかし臙脂を塗りしくちびるに
　　筆をふくみて書く文ぞこれ

と讃嘆している。又口で縫物もしている。

しかも順教尼の生涯は、このようにひとり自身の身体の障害を越えたばかりでなく沢山の身体障害者を手元に引きとり、教え導き、はげまして本年八十年の苦難と奉仕の生涯を終えた。

愛書と求道

近角師著「親鸞聖人の信仰」⑤

福島政雄

往還回向（おうげんえこう）という題で、先ず極楽無為涅槃界（ごくらくむいねはんがい）の光景は、凡夫の境涯では証せられず、安養の浄土に入って証すべしと云われ、大無量寿経の「自然虚無（じねんこむ）の身、無極（むごく）の躰（たい）なり」という語を引いておられる。善導大師の言葉も引いて居られる。

西方寂静無為（さいほうじゃくじょうむい）の楽（みやこ）には、畢竟（ひつきょう）逍遙として有無（うむ）を離れたり。大悲心に薫じて法界に遊ぶ。分身して物（ひとのこと）を利すること等しくして殊なることなし。或は神通を現じて而して法を説き、或は相好を現じて無余に入る。変現の荘厳意に随って出ず。群生見るもの罪皆除かる。

如何なる言辞でも形容出来ない絶対無限の境である。阿弥陀如来も釈尊も、十方の諸仏も聖徳太子、法然上人の如き化身まで皆この広大の境よりあらわれたのである。

この霊境に入りて見ればその境よりあらわれる働きは衆生済度より外に道はない。今まで深き眠りに入っていたものが忽然と目ざめて来れば、何とも云えぬさえざえした心地である。而して自ら目醒めたものは、眠れるもの、恐ろしき夢のために苦しんでいる者をゆすり起し、呼び醒すより外に仕事がない。今もその通り、仏陀の境界が覚である、無明長夜の深い眠りに沈むのを不覚と名づけ、これより覚醒したところが始覚である。いよいよ無明の夢から醒めて見れば、そこは昔から目醒めた境界であるから、これを本覚と名づける。弥陀如来はその本覚の境から出て来て、広大の恵みを十方に垂れ給い、我等を導いて下さる。我等もその広大の仏境に到りおわれば、かえって大悲を起してこの人生の上に帰って来て、衆生済度の大事業を為す。これが還相回向である。この還相の道筋は目醒めたものが眠れ

る人を起すので、つまり真実証に到る自然の結果である。

天親菩薩の浄土論には、五功徳門ということを示してある。五門とは、一には近門（ごんもん）二には大会衆門（だいえしゅもん）三には宅門、四には屋門（おくもん）五には薗林遊戯地門（おんりんゆげじもん）これである。

その近門とは仏の恵みの聞えた時、恰も監獄にある不孝者の心に親心が徹底した時、これまで親の家庭に遠ざかっていた者が、親の方へ近づく如く、絶対の仏陀のお慈悲が届いて見れば、心が仏の御許に往ってあるところである。

次に大会衆門とは、これは人生において仏の恵みを喜ぶ者は凡聖をいわず、智愚善悪を論ぜず、仏陀を中心とした如来の眷属である。よって曇鸞大師は「同一に念仏して別の道無き故に、四海の内皆兄弟なり」と喜ばれた。

第三に宅門とは、いよいよ人生の寿命をおえて、その色身の滅びたるとき、極楽界に往生することは、例えば久しく家出していた者が親の邸宅内に帰り来ったところである

第四に屋門とは、極楽に入って絶対無限の法味楽をうけるところで、例えば奥座敷に入って一家団欒（だんらん）して、種々の珍味を喫して、且つ語り且つ喜ぶところである。

このように親の家庭で十分の慶楽を受けた上は自ら後庭に出でて、林間に逍遙するが如く、一たび無上涅槃を証得しての後には、かえって煩悩生死の園林に出て来るのが自然の結果である。これが第五の薗林遊戯地門である。

この五功徳門は、往相回向より還相回向までの筋道を述べられたものである。

仏陀の境涯は智恵、慈悲の二つである。この二つを以て我等に臨むが方便である。親鸞聖人を以て見れば、聖徳太子は観音、慈悲の化身である。法然上人は大勢至、智恵の化身である。而して煩悩生死の園林間に明らかに　この如くの方便力をあらわして、御導き下されたと信じて居られたのである。聖人の浄土文類聚鈔には次のように述べられてある。

若しは行、若しは信、若しは因、若しは果、若しは往若しは還、一事として如来清浄願心の回向成就したもうところにあらざることなし、応に知るべし。

次に近角師は、真化仏土について述べられる。

聖人は如何に仏陀を考えられたかということが教行信証の「真仏土巻」において顕わしてある。それはどうあらわしてあるかというに、聖人は真の仏陀は、光明無量、寿命無量の覚体であると定められた。この無限の光明、無限の寿命の仏陀には、或は時間的に際限なく、空間的に横に辺

際のない哲学的実在なりと解釈するものもあるが、ただそれだけで慈悲の御仏ということに気づかざれば、それは宗教の中心としての仏陀ではない。聖人の示し給う仏陀は無限の慈悲と無限の智恵との塊りであるが、聖人はこれを理窟から考えたにあらず、自ら仏陀に遇い奉って光明の摂取にあずかったそのままの告白である。

この仏陀の境は、即ち仏の応身の釈尊が八十年の生涯を終って還帰せられた涅槃の境涯である。この涅槃の境涯をば委しく説いたのが彼の「大般涅槃経」であって、聖人は真仏土の巻には皆これを引いて置かれる。聖人の意によれば、一代の経文に説かれた沢山の如来は、皆光明無量、寿命無量の仏陀である。即ち阿弥陀一仏であるという。

最後の章で、近角師は、善悪摂取という題の下に、承元の法難とこれに処せられた聖人の心境とを述べてある。

斯を以て興福寺の学徒、太上天皇（号後鳥羽院諱尊成）今上（号土御門院諱為仁）、聖暦承元、丁卯の歳、仲春上旬の候に奏達す。主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ。ここによりて真宗興隆の大祖源空法師、ならびに門徒数輩、罪科を考えず、みだりがわしく死罪に坐す、或は僧の儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す、予は其一なり。

このような迫害の中において、身は砕けても唯念仏一つをもって変ることのないのが両聖人の信仰である。拾遺古徳伝に法然上人が配所に赴き給う事情を敍する中に、

承元元年三月上旬の頃、聖人すでに配所に赴きましますべきなりければ、月輪の禅定殿下の御沙汰として、法性寺の小御堂にわたし奉り逗留（とうりゆう）をなしき。三月十六日都を出でたもう。すでに進発のとき、卒爾（そつじ）をかえりみず一人の門弟に対して、一向専念の義をのべたもう。御弟子西阿推参して曰く、是の如きの義しかるべからず覚え侍りと。聖人のたまわく、汝経釈を見ずやと。西阿申して云く、経釈はしかりといえども、世間の機嫌を存するばかりなりと。聖人またのたまわく、われたとえ死刑に行わるとも、更に変ずべからずと云い、その気色もとも熾盛なり。見たてまつる諸人涙を流し随喜せずということなし。

法然上人の念仏は、ただ口で称えたのではない。身を以て説いて下された有難い念仏である。

或人が法然上人に尋ねて曰く、「持戒して念仏すると破

戒して念仏すると、その功徳同じというは如何」と。上人答えて曰く、「持戒破戒というは戒ありての上の事なり、例えば畳あるところにこそ、破れたると破れぬとあるが如し、今の我等は無戒なり、如何でか破と持とを沙汰すべけん。かくの如き無戒の比丘も、此の念仏のみにて往生するは本願の約束にてあるなり」と。

このように懇々教えられても、なお世人はこの念仏は無戒などの者の称えるのでは功徳は少なからんという、自分の計らいが止み難い。

そこで親鸞聖人は断然在家の行儀を以て妻を持ち子を持ち、この人生の上において汚れたる無戒名字の比丘として身を以て本願の念仏を立証し給うたのである。

親鸞聖人は化身土巻の本において、伝教大師の末法灯明記を引いて、末世のものの持戒の出来ぬあさましい有様を委しく示された。その中に云く。

将来の世において、法滅尽せんと欲せんとき、当に比丘比丘尼ありて、出家を得たらんもの、己れが手に児の臂をひき、而して共に遊行して彼の酒家より酒家に至らん

これは末世は、実にこの如き有様であると示す一面においては、聖人が自らひどい懺悔をせられたのである。

要するに親鸞聖人が自ら悲歎せられた他の一面においては、唯々仏の恵み一つを喜ばれたのである。この仏の恵み一つを喜べば、身を清めることもいらず、心を静めることも須（もち）いずして、しかも求めざるに、天神地祇はこの念仏者を護持養育し、日月星辰も常に照覧擁護をあたえる。一家の中も広き世界も、天の星も地の文も、みな仏の恵みの外はない。かかる広大の御恵みを知らずして、両聖人を流罪に処するに至ったのは、まことに憐むべきことである。常の人ならば、罪なくして配所の月を眺めることであるから、如何ばかり冤（うらみ）を訴え、人を怨むのであろうに、聖人は、

大師聖人（源空）もし流刑に処せられたまわずば、我また配所に赴かんや。もし我配所に赴かずんば、何によってか辺鄙の群類を化せん。是なお師教の恩致なり。

というて喜ばれた。たとえ法然上人にすかされ参らせて地獄に落ちたりとも、更に後悔すべからず候と、師教を全く信じて、真の恵みの広大なることを喜ばれたのである。而して一切善悪のものすべてと共に、この無限大悲を喜ばんとせられたのである。

（昭和四十一年十二月二十一日稿）

近角先生聞記

吉田延世

「講題」『君則臣則と篤敬三宝』聖徳太子十七憲法の第二条と第三条を中心に、近角常観先生はだんだん御講話をおすすめになり、次ぎの如く、難波大助の教誡に当られしことをお述べになりました。

（昭和十年五月七日）

難波大助の如き、大逆罪を犯した者の教誡は、歎異鈔と太子の十七憲法をもとにして致すより外ないと思いました「自分（大先生のこと）は、あの大逆事件のあった後、自らすすんで、かくの如き者のため、教誡に当らねばならぬと考えていた矢先、時の司法大臣、横田千之助氏の招請で直ちに大助の教誡に当りましたが、その教誡にあたる前に、心中に期するところがありました。それは、彼ほどの者なれば、若し彼が自由の身であれば、天子に向けて発砲した銃口をこの我が胸に擬すること必定であろう。いわんや、ことばを述べる段には、抗弁、口答え忿り、等々するであろう。かく自分は腹を据えてかかりました。」

いよいよ彼の前に出て教誡に当ったわけであるが、果して彼は、憤然として曰く、

「貴様は、誰の頼みをうけて、ここへ来たか」

「ブルジアーの味方となって、このおれを教誡しようとする気か」と形相ものすごくつきかかって来ました。

……自分は一時それを聞くと、ムッと腹が立ってきた。けれど、イヤイヤここで自分も怒ったら百年目、ドチラが説教さるるかわからなくなると気付きました。

……たのまれてここに来たともいえず、さりとてウソを云うことになれば、ソコに引っかかることになりますと、彼を説得する機会を失うてしまう。しばらくして自分は、

「それは、それとして、マア——私の云うことをききたまえ、……昔々、親不孝の子がありました。……」と姥捨山の話、皆さんにお話しをするいつもの姥捨山の話をしたわけでありますすると彼はムッとしていたが

「あてこすりを云うない。そんな話は知っておるわい」

と口答えをする。このままでは彼がわめきあばれるので話を進めて行かれないから、自分は、

「今日はコレでおしまい」と彼と別れて帰ります。

翌日、彼と会って教誡の段になると、また彼は怒り出して話はできません。左様になると「今日はコレでおしまい」と云って帰ります。その翌日もこの調子、次の日も、またその次の日も、同じ調子を繰り返しました。自分としましては、唯々如来大悲の本願を説き、仏の大慈大悲の親心を何とかして、彼の心に届けようとの切なる願いを続けて話をしました。かくの如くして、その月も終り、次の月も終り、丁度三ヶ月目の或る日のことです。

大助はそれまでは、何時もムツとだまりこくって、一言も云いませんでしたが

「随分に、今までここに来た人（キリスト教の牧師等）もあるが、あなた位シブトク来て、同じことをクドクド話す人を見たことはない……」と口をきり出しました。

私はそれに力を得て、如来大悲の親心の尋常ならぬことを説き続け、終りに、

「現在、君の父君は、どうしていらるると思うか、村人からは国賊と罵られ、迫害せられ、己れ（父君）は、君の居間に、外より釘づけにして蟄居、謹慎、ひたすら罪を天下に詫びて居られますぞ……」

と涙ながらに告げると、さすがの大助も、首をうなだれ何か暗涙にむせんでいた様子でありました。

そのうちに刑期がせまり、大審院で、検事の審告論を読みあげて、その文が、親云々のくだりにくると、彼は目を覆い、顔を伏せ、手をかざして、

「もう、そのところは読まんでくれ！」

と言ったと、後で人からきき及んだことです。

奥山に枝折り枝折りは、誰がためぞ

親の身すてて帰る子のため

〈昭和四十三年三月末日、再録〉

（後記）私は現在このお話を筆録し、常観先生の御声や先生の面影をありありとお偲び申して居ります。戦時中計らずも九州に来まして、大隈の有田さん宅で、武夫さんのお父さんと、この話をして、三人で泣いてしまいました。

姥捨山の話をすれば「あてこすりを云うな！」と罵り、怒りわめいた大助も、大慈悲を届けようとされる大先生の太陽のこころに、氷がとける如くに、大助の心も和ごみ、懺悔の涙を見るようになりました。

（吉田生）

疾病と信仰

（医師）麻生介

まえがき

人間には「善くしてゆきたい」という希望をもちながら絶対の善がどうしても出来ない行詰りがある。

そこで「出来なくてもよい」でも「善くせよ」でも真の解決にはならぬ、どうすればよいか。

又、人間には「永遠に生きてゆきたい」という希望をもちながら必ず死ななくてはならぬ悲しみがある。真に死に直面してみれば「大丈夫治ります安心しなさい」もたのみにならぬ暗黒な世界がある、これもどうすればよいか。

この二つの縁によつて人が信仰を問題とする。そこで家の伝統的の宗教は何であろうと、真の救いが私一人に来なければまことの信仰、絶対の安心は出来ない。

一体、私達の考えは相対五分五分であるが、そこをよく教えて絶対の恵みに遇わせるのが仏の光明である。又、私達がこの人生に於いて生きているのは僅かの間であるが、そこを憐れんで無限の生命を与え、常住の国にみちびくのが仏の願力である。

昭和四年、稿す。

一、自殺と信仰

「病気が治らなければ、むしろ早く死んだ方がましだろう、そうすればこの様な苦痛も受けず、人にも迷惑をかけないですむから……」

という人もある、ことに経過のひまどる病気にかかるとそんな考えをおこす患者がある、一寸考えるともっとものようであるが、矢張り苦を逃れて楽を求めたいという希望にすぎない、而もその希望が満たされないから死ぬるまで煩悶の世界である。ここで死後は果してどうなるかという点になれば、吾々の考えが必ず行き詰るのであるが、唯ボンヤリと、「今までさほど悪いことをした覚えがないから、死んでも悪い処には行くまい」と自分を買いかぶっている人もあろう。或は「どうせ人間は一度は死ぬにきまっているから仕方がない」と深く考えない人もあろう。或は「未

来などあるものでない、死んだあとは火が消えたようなものだ、未来に地獄極楽があるように教えるのは、この世で悪いことをさせぬ方便に過ぎない」と考えている人もある。

現に人ではない、私自身がそういう考えをしておった。

「自分は相当修養もしている、正直にして行きさえすれば信仰の必要はない、未来はあるものではない」と浅薄な智慧で自分ぎめをしておった。然るに一度、仏の本願、即ち絶対の真実を聞かされて見ると、今までの考えがコロリと変ってきた。自分の修養している、正直にして行くというのは、本当に末通ったものではない、必ず実際問題においてこわれて、腹を立てたり、愚痴を起したりしている。善いことは仕度いと思いながら出来ず、悪いことは止めたいと心がけながらやまぬのが吾々の実際の性分である。しかるに如何なる慈悲深い人でもあきれてしまうこのような性分に向って、永遠にお見捨てない御真実で見て下さるのが大悲の親であったかと、夜が明けて見れば、未来の問題までも自然に解決が出来てくる。御和讃に

「信は願より生ずれば　念仏成仏自然なり
　自然は即ち報土なり　証大涅槃うたがわず」

とある、なお歎異鈔には

「先ず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死をいずべしと信じて、念仏の申さるるも、如来の御はからいとおもえば、すこしも自らのはからいまじわらざるがゆえに本願に相応して真実報土に往生するなり」

とある。本願を信じて念仏申さるる身にさせていただいたものは、未来の果報に毛頭うたがいはない。この現在と未来の二世のお恵みに満足が出来た上は、人生に如何なる苦悩があろうとも〈其人が病的精神状態でない限り〉自分で生命を断つ、即ち自殺するような考えはおこらない。死によって煩悶の解決を急ぐのは、仏の恵みに十分満足が出来ていないか、或はその教えを誤解しておるからである。

不治の病気をして生きながらえて居っては自分も苦しみ周囲の人にも迷惑をかけるような場合にも、その全然してみようのない状態を何処々々までも同情して下さる御真実一つに満足して念仏しながら未来の仏果を待つの外に道はない。歎異鈔に

「なごりおしくおもえども娑婆の縁つきて力なくしておわるとき彼の土へはまいるべきなり。いそぎまいりたき心なきものをことに憐れみたまうなり」

とある。現世に後髪をひかれながらも、万策つきてやむを得ず自然にいのちの終るときに願力の不思議なお力によって彼の浄土へ生れさせて下さる。急ぎまいりたい心のないものをことに憐れみ給う思召しである。

自殺して病苦を逃れたいと考えている間は、まだ自分の

はからいの方が強く、仏の御恵みが受けられていないすがたである。而して自分のはからいにおちて行く者を、何処何処までもお見捨てない御恵みの方が強いから、ついに打ちまかされた時、初めて不思議の誓願に夜が明けて、思わず念仏が称えられる。歎異鈔に

「信心さだまりなば、往生は弥陀にはからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず。わろからん〈罪悪や災難等〉につけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし、すべてよろずのことにつけ往生にはかしこきおもいを具せずしてただほれぼれと弥陀の御恩の深重なることをつねにおもいいだしまいらすべし、しかれば念仏も申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然とは申すなり、これすなわち他力にてまします」

とある。誠に生死の実際問題にあたって全くしてみようのない場合でも、ただお見捨てない願力を仰げば自然に解決されてくる、これが他力信仰の徳である。

或る時、私の方に一人の婦人が訪ねて来られた。丁度夕方であったが、その婦人の顔面をよく診れば癲病の初期である。何の用事かと尋ねて見ると、その人は、

「数ケ月前から発病し別府に来て入湯しているうちに重くなった。国を出る時は、人目にわからぬ程であったが今はこの通りであるから、国へ帰ると親兄弟や親類の迷惑にもなるから、どうかして世間に私の病気の知れないうちに生命をたちたい。先生の御話を先日西方寺でお聞かせにあずかって、後生のことはわかりましたから、御願いします」

というので、暗に毒薬でも貰いたいという希望であった。至極もっともなことで、同情すべきではあるが、私はその婦人に向って

「あなたはまだ私の話が徹底していない。自分のはからいで死を急ぐのは、生も死も大慈大悲に打ちまかせたすがたでない証拠である。親兄弟に迷惑をかけるから死を急ぐというのも結局自己のはからいから、現在の苦痛をのがれたい欲望に過ぎない」

ことを説いて、約二時間ばかり我を忘れて大悲の限りないおほしめしを繰り返し、まきかえしお話したところ、幸にはじめて徹底されたものと見え

「私の考えが間違っておりました」

と云うて、大変よろこんで覚悟した死をひるがえし、帰国されたことがある。ウツカリするとこの婦人のような間違いを起すから、よく気をつけて聞かなくてはなりません。

呉々も真の信仰をよく聞いて、病床に呻吟しながらも、す

べてを仏の御はからいにおまかせさるることを切にお勧めいたします。

二、疾病と世間

信仰が実際生活にどういう関係があるかということは未信の方からよく尋ねらるる問題である。それについて次の実際の例をもってよく答えている。

私の知っている一人の桶屋さんがあった。一人者で非常に悲惨な生活をしておったが、肺病になっていよいよ暮しが出来なくなり、遠方に住む弟から僅かに仕送りを受けて木賃宿に泊って、僅かに仕事をしながらヤツとその日を送って居った。

そのうちに病気が段々に重くなり、セキの出かたがひどいので同宿の者や、宿屋の主人から嫌われて、やむを得ず再三宿を替えなければならなかった。そこで悪いとは知りながら〈戦前の医学で難病に数えられていた故〉

「自分は酒を呑み過ぎて心臓がわるくなったからセキが出るので決して肺病ではない」

というて世間をごまかして居るということであった。

その桶屋さんは肺病という真の本性の病気を内にかくしておいて、表面には心臓を出して世渡りをしなくてはならぬ、若し内にかくしてある肺病の方を世間の人から知られたら直ぐに排斥されるから決して油断はならぬ。悪いとは知りながら、心臓を仮面として世間をごまかしながら不安の生活を続けて、宿屋から宿屋を渡りあるくの外はない。

吾々の心も実はその通りであって、実際には

「善いことをして居るというのは心臓の仮面であって、どうしても善くなれない、悪のやまぬ肺病が内にひそんでいる」

これを世間にありのままに出せば直ちにあきれて排斥されるから、表面を心臓で修飾しておるにすぎない。すなわちこの世から彼の世へと木賃宿を迷いつつ渡りあるいている状態である。

ここに仏の本願というのは

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮をいだけばなり」

とあって、表面の心臓、すなわち賢善精進をとるというのではなく、内部に潜んでいる何とも仕て見ようのない肺病即ち虚仮不実なる点にあきれず、その者をこそ真に憐れみ給う本願、その者をこそ迎え給わんとの真実報土である。五分五分の実際生活において苦悩の日を送りながら、この絶対の本願に遇い、未来報土の往生を期することが人生最大の目的であり幸福であります。

三、婦人と家庭

御婦人が如何なる困難な問題についても忍耐して居られるということは、修養の立場から見れば実に立派であるけれども、その本人としては胸中の苦悶が甚だしいのみならず、遂にはそれが重なってノイローゼになり、或は自殺その他の惨劇を演ずることになる。

私の近くに一人の婦人がある、主人が他の後家さんに関係して居るのを知っていたが大抵は辛抱もして居たが、近頃主人が段々厚顔になり眼の前もはばからぬ振舞をするので最早堪忍の緒が切れて、沢山の子供をふり捨てて実家に帰ったようである。しかし帰って見ると、遺した子供の愛情にひかされて、また主人の許に帰ってくるという状態である。つまり周囲の状況を変えて見たところで安心は出来ない。

「波の音聞くがいやさに山家にすめば、またもやきこゆる松風の音」

で、何程環境をかえてみても同じことである。それかと云って夫の心が元々通りになるように、愛が復活するように祈って居っても、それは丁度波の音や松風の音が無くなるのを待って居るようなもので何時まで経っても無駄である

私はこの不幸な婦人と信仰の話をしたいが、まだその御縁がない。しかし世の中にこの婦人と同じ境遇に居らるる方は沢山にあるから、その方々に向ってお話し申して見たい。実際にその様な境遇に居られる時は、どういう方面に光明を認めて生きて行くことが出来るか。

私としては実際にその境遇になって信仰に夜の明けたことをお話しするのが、最も早わかりがすると思われる。それは福岡県のある村に姑と夫婦と子供三人暮しの家庭があった。夫は満州の方へ長らく出稼ぎに行って、多少お金も出来て、久し振りに帰って来た。然るに主人が出稼中に情婦が出来ていて、帰ってからもその縁が切れない。ついにはその女を妻にしたい考えから、本妻に出て行けがしにするようになった。その妻君としては、三人も子供がある のでなかなか家を出ることも出来なかった。それに幸いなことには姑が自分に味方してくれるので、それを唯一の頼みとして不愉快ながらもジツと辛棒して居った。

しかし夫は相変らずその女に心を奪われて一向に家事をかえりみないので、姑も遂に我身の心淋しさからわが子の「カタ」を持ち、情婦を家に入れることに同意して、嫁に早く出て行けがしの振舞を仕向けるようになった。

とうとう嫁さんも立つ瀬がないから、実家に帰って両親や兄弟に相談してみることになった。実家は弟が立てて居るので、自分の苦しい立場を打明けて、引き取って貰うように相談すると弟は

「先方が出すというのなら帰るより仕方があるまいが、唯つらくあたらるるからというて、三人も子供のあるのに帰るというのは余り早計ではなかろうか、先ず隠居に行って両親とも篤と相談して見て下さい」

というので隠居の方に相談してもやはり弟と同意見であった。

その婦人はこうゆう時こそ親兄弟があってたよりとなると思っておったのに、今の自分の苦しい胸の中を十分見て貰えないとは何というなさけないことだろうか

「もうこうなった以上は生きて居っても面白いことはない、むしろ早く死んでこの苦悶から逃れた方がましだ」

と考えた。それにしてもあの幼い子供を何処の馬の骨ともわからぬ後妻に渡して苦労させるのも可愛そうである。むしろ自分が未来まで一緒につれて行ってやろうと決心した。その村から一里ほど離れた所に小さな湖水があるからそれに飛びこんで死ぬる覚悟を定め、幼い子供を背におうて夕方から家を出かけた。その湖水に着いてから石を袂に入れてすでに飛びこもうとすると、背の子供が泣いてなかなか決心がつきかねた。そのうち東天が白らむ頃に不図

「自身は死んだら未来はどうなるだろうか、死ぬことはいと易いことであるが、死んださき迷うては困る、ヨシ死ぬのは何時でも死なれるから未来の問題を解決してからにしよう」

と一旦死をひるがえして村に立ち帰りました。

丁度その時、私の知人がその村のお寺で講話をして居られましたが、その婦人が朝早く訪ねて来ました。私の知人は、何事であろうかと、よく聞いてみると前記の始末で、現在の苦しい境遇をすつかり打明けて

「未来の問題について不審があるから教えて下さい」

というのであった。私の知人は婦人の身の上をよく察して深く同情し、仏の本願を約二時間にわたってこんこんと話したところ、その婦人は非常に感動して打ち伏して泣き崩れた。しばらくして頭をさげ、丁寧に礼をのべて帰りかけようとしました。知人はすぐさま

「どこへ帰るのか、御主人の許か、それとも実家か」

と尋ねると、婦人は落着いて

「主人の許にかえります」

と答えた。私の知人はそこで

「主人の許に帰っても矢張り周囲の人に同情が無いから貴女の胸の内の苦しいのは同じでないか」

と問うと、婦人は笑顔をしながら、

「私はどの様な難儀があっても、仕て見ようのない私の胸の中を見て下さるお方に遇わせていただいたから、最早苦痛とは思いません、どんな地獄の中でも居れるだけ

の力をいただきましたから周囲の人の同情など決してあてにいたしません、実にありがとうございます」

と厚く礼をのべたそうである。

この婦人は始め、周囲の人の同情に生きようとしたが、それが頼みにならず、一たん死を決して未来の問題につきあたり、それから永劫の苦痛を脱するお見捨てなき仏の本願のまことに生きかえった。周囲の事情はすこしも変化しないまま内心にお見捨てない恵みを聞き開いたことが非常なる力となったのである。若し周囲の状況が自身に都合がよくなったことによって安心しているのであれば真の信仰とは云われない。大抵の人が周囲の状況が自分によくなることのみ骨折っているから、真の解決は内心の問題であるということには容易に気づき難いのである。人間はいよいよあて頼りにするものがなくなると死ということを考えるようになる、そしてその頼りない淋しい心中を見てもらえるものがほしくなる、ここになれば理窟を離れて自然に

「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願」

一つが信ぜられるようになり、その本願に腹がふくれてみれば自然に人生にかえってくる道が開けるのである。

今の婦人は夫の許に帰ったが、夫も姑も相変らずつらくあたる、しかしつらく当たられればあたられるだけその心中をお察し下さる本願をいよ〳〵深く仰ぎ、今までは互に五分五分に出るか、或はジッと辛棒して内心が苦悶しているにすぎなかったのが、心の底が抜けて、その苦が本願の海に流れ去って、やわらぎの光がさして来るようになった……。

○……○……

三船十段の自序伝抄

なるようにしかならぬ

世間によく「なるようにしかならぬ」と云う。それは決して放任することではない。なるようにしかならぬ、とは水が低きに流れ焔が高くあがるということと同じで、自然の姿であり、そこにはそうならねばならぬ理由があってのことで、法則通り行われていることなのである。自然の法則通りす分のくるいなく行われていることが、なるようにしかならぬということである。

修行の順序

自分は始めは修行時代、教授時代、精進時代に分けたが教授時代は、教えることによって気づかぬことも知らされるもので、これは修行時代の延長で、矢張り修行時代に入るべきだ。

次に古稀にもなり、喜寿にもなれば精進時代になる。それは柔道の稽古ばかりでなくてよいと云うが、自分は矢張り毎日柔道をしている。これがまた一切に通じて行くようである。

内は愚にして外は賢なり

千葉崇憲

是非知らず邪正もわかぬこのみなり
小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなり

先月仏教婦人会の講話を依頼された。お話せよといわれると心に苦痛を感じるのが常である。ともに一夜お念仏を語ろうというのであればうれしいのであるが……。

しかし、このごろ如来、聖人の御命令である。ご用をさせていただくのである、というおもいがして素直に「ハイ」とお答えしておいた。ところがその日が二月十六日であり例の豪雪であった。汽車もバスも、バタもタクシィも途絶有線電話も不通で問合せの方法もない。向うからかかって来るかと待っていた電話もない。仕方がないので二時間近くかかって参上した。もちろんお参りの方はない。ローソクのあかりで住職の方とお話した。そして雪に足をとられつつもまた二時間近くかかって帰宅した。

雪の夜道をひとり歩きながら申すお念仏は実に楽しいものである。大きな月が出て、白皚々（はくがいがい）の山野を照らしてくださる、まことに得がたい法縁であった。

このとき私はかねて仏教婦人会のみなさんにお話せよという如来、聖人のご用命とおもっていたが、そうではなくて、御住職と二人でよろこべとのことであったのだなあとおもいながら帰ったのでございました。それから数日して自照会の集いにまいり、大雪の夜のご法縁をおもうていましたところ、突然「おまえのためである」というようなひびきがきこえてまいつたのであります。

如来、聖人のご用をさせていただいておったのではなかったのであります。人にお教えするお仕事をさせてもらっていると考えたのは大きなうぬぼれであったのです。いや私がうぬぼれをもったというよりは如来さまがうぬぼれさせてくださったのかもわかりません。というのは、如来、聖人のご用と感じなければあの無いにきまっていそうな会にすこしも大儀と思わずに出かけられはしなかったでありましょう、また御住職との法縁をよろこばせていただけなかったでもありましょう。ところがそれらはすべて副産物であって肝腎要（かんじんかなめ）は私によびかけ、私をよろこばせてやろうとの親心であったのであります。

如来聖人のおめあては「私自身」であったのであります如来は永遠の過去世から現在、さらに永劫の未来にかけて常不断に「わがいとし子」とよびつづけてくださっているのであります。私がその呼びたまうみ声に、すなおに「ハイ」と、自然法爾（じねんほうに）におこたえできたのは昭和二十一年の九月三十日のことであります。

以来私はいつもいつも如来さまを忘れておりますけれど如来さまは決してお忘れなく喚んで下さる。そこでここに述べましたように雪の夜道での如来との対話が楽しくてならぬようにさせられてまいったわけであります。

お念仏というものは集団の中で高唱するよりも早朝や深夜、朝はやい寝覚めや、ひとり道にしみじみと申すのが楽しいのであります。念仏は親と子の対面、対話であります

こうして仏智に照らされ大悲のふところにいだかれてみると、わが身のいのちのはかなさ、わがこころのみにくさ浅ましさ、しかも日々夜々たよるべからざるものをたよりとし、いかに善をなしたとて、すべてこれ名聞利養、名と欲と得（とく）と道づれでないものはちっともない、ということにいよいよ気づかされるのであります。すぐ、おのれよし、人悪しのあさましい性根のなくならぬ身と知らさるのであります。

「蚊一つにほどこしかぬるわが身かな」

と、内に虚仮を抱き外相に賢善をあらわす域を出られませぬ身には、如実修行相応（によじつじゅぎょうそうおう）の道は、如来よりたまわる信心一つであります。

昭年四十三年三月十八日、第四十七回・求道会報

○　○

善悪二業のこと

もし悪業を心にまかせてとどめ、善根をおもいのままにそなえて、生死を出離し、浄土に往生すべくば、あながちに本願を信ぜずともなにの不足かあらん。そのことといずれも心にまかせざるによりて、悪業をばおそれながらおこし善根をばあらませども、うることあたわざる凡夫なり。かかるあさましき三毒具足の悪機として、われと出離に道たえたる機を、摂取したまわんための五劫思惟の本願なるゆえに、ただ仰ぎて仏智を信受するにしかず。

〈覚如上人『口伝鈔』〉

歎異鈔第一章（一）

花田正夫

①弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益（りやく）にあずけしめたまうなり。

②弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪悪深重煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてましまします。

③しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、悪をもおそるべきからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと、云々

往生の道

白井先生が「往生をば」の一句に着目せられて、この章が述べられるきっかけには、往生の道をおたずねした問いがある、と仰言る。なるほどその通りだと思うので、その問いを次のように想定した。

「生死（まよい）を離れることが仏法の根本と承っておりますが、まどいというまどいをのこらず身にそなえた煩悩のかたまりとも申すべき凡夫の身といたしましては家を捨て欲をはなれて修行を重ねる聖者方の道は心も言葉も及びもつかぬことであります。ただかかる凡夫のたすけられるには、阿弥陀仏の本願を信じ、浄土に往生させて頂く道ばかりであると、かねてお聞きしておりますが、それには如何ように弥陀仏をたのみ、また如何ような心で生活したらよろしいのでありましょうか」

と、あったと思われる。

聖道門と浄土門

仏法に、自分の力をたのんで成仏を願う聖道門の教と、阿弥陀仏の本願にたすけられて、仏の浄土に生れやがて成仏させて頂く浄土門の教の二つが説かれている。

然しこれは二つの道があるのでなくて、聖道の教を実践して、それがわが力では不可能であると自照された時、聖道の教の究極に達したといえる。

そのことは仏法ばかりでなく、道徳の教においても高い理想を掲げて真剣に実行して行けば、進めば進むほど自分自身の駄目さが知れて、理想は崩れ壁につきあたる。又哲学にしても、ソクラテスの云ったように「真智は無智なり」で、真実を求め求めて先ずおのれの無智が知らされてくるそこから真の哲学の門がひらける。

さて、聖道の教の徹底したきびしい鏡の前に立って、我執、我見のうぬぼれとその愚さと無力さが知らされる時、幸によき師、よき縁に催されて、弥陀の本願にあいまつる時、浄土の光が射しそめてくる。先ずその事実を印度、中国、日本の七高僧方のあゆみに照らそう。

印度の竜樹菩薩は、大智度論（だいちどろん）では仏教以外の教に対して仏教の本領を明示し、中論（ちゅうろん）では仏教内部において仏陀の真意を説き、易行品（いぎょうぼん）では御自身の仏法の領解を述べられている。その易行品に「仏道において必ず仏に成れるという位に到達することは至難のことで、その途中に独善の洞窟におちこむならば菩薩の死に相当する。その道は険しく恐ろしい限りであるが、若し諸仏の教にすみやかに、この世から不退転のさとりを得る易行の道があればお教え下さい」

という問いを出し、それに答えて、

「汝の願いは大丈夫の大志ある者の口にすべきでない、真に仏道を求める者は三千大千世界を挙げるよりも重いよろしく頭燃（ずねん）をはらうように身命を惜しまず精進し続けてこそはじめて不退転の位も得られる。もし仏の方便をたのんで安易の道を求めるなどとは怯弱下劣（きょうじゃく）（意志のよわいみさげはてた）の者の言うことである」

ときびしく叱責してのちに、然しどうしてもその道に進むことが出来ないならば、仏に不思議な方便がある。

「若しはやく不退転地にいたろうとねごうならば、己を空しくして深い恭敬の心をもって、名号（みな）を執持（たも）ってこれを称えよ」

と易行の道を教えられたばかりでなく、御自身もまた、菩薩のさとりをすて、怯弱下劣の者にかえり、至心に弥陀仏の本願に帰して、自然に不退転地を得てひとえに浄土往生の道を辿っていられる。

竜樹大士世にいでて　難行易行のみちおしえ
流転輪廻のわれらをば　弘誓のふねにのせたまう

天親菩薩はまず小乗仏教をきわめて、そのいまだ不十分な点を批判し、自見をもととして新仏教を熾（さか）んに提唱し

た時、兄の無着菩薩が懇ろにこれをさとし、大乗教典を教えられると、今までの非を悔いて、舌をかみ切って仏におわびしようとまで思いつめた。その時、兄菩薩から「その舌をもって大乗仏法を讃仰せよ」といさめられて、そのことに生涯を貫ぬき、ことに大無量寿経によって、浄土論を著して、御自らも尽十方無碍光如来（阿弥陀如来）に一心に帰命して、有縁の人々と共にひたすら浄土を願生せられた。

釈迦の教法おおけれど　天親菩薩はねんごろに
煩悩成就のわれらには　弥陀の弘誓をすすめしむ

中国の曇鸞大師は菩提流支三蔵（ぼだいるしさんぞう）のきびしい教誨をうけて浄土の教に帰し、竜樹天親の両菩薩の玄意にもとずいて浄土論註を著し、大師自身は「われすでに凡夫にして智慧浅短である。いまだ菩薩のさとりに入ることが出来ないからあらゆるものに平等心になり得ないそのありさまは愚かな牛のようなものであって、若し放し飼いをされたなら帰る途もわからず、はてしなく迷い苦しむほかはない。かかる愚かな牛が身を全うするには、牧草を槽櫪（そうれき）（かいばおけ）に入れて、その方に心を向けさせて、それで導くように、我等も西方弥陀の浄土に心をかけて、念仏のまぐさで導かれるほかにわが成仏の道はない」と、世俗の人々に常に語り、われらが帰すべき道を述べられた。

本師曇鸞和尚は　菩提流支のおしえにて
仙経（仙人の長寿の法）ながくやきすてて
浄土にふかく帰せしめき

道綽禅師は、曇鸞大師の世俗の人々に常に仰せられた前記の碑文を一読せられて「大師の如き大徳がすでに聖道の行をおいて浄土の門に入られているのに、自分のような小人輩が何を迷っていたのであろうか」と、今まで自分をたのんで為せば成る式に考えていたことが身の程もわきまえぬうぬぼれであったと気づき、たちどころに浄土の教に救いを見出された。そして御自身は「五翳面墻・ごえいめんしよう」（五つの塵埃が目をおおい、垣にかおをぶっけて、目は見えず、進むに進まれぬ身）と慚愧されている。

本師道綽禅師は　涅槃の広業さしおきて
本願他力をたのみつつ　五濁の群生すすめしむ

善導大師もまた「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み常に流転して、出離の縁あることなき身」とも「我等愚痴の身にして曠劫よりこのかた流転せり」とも告白懺悔せられて、幸にも釈尊の導きを蒙って弥

陀仏の弘い本願を聞くことが出来たと慶喜されている。かくて大師は一切の凡夫の救いを明らかにされると共に、世の非難にたえて念仏の一道を専念せられた。

弘誓の力をかぶらずばいずれの時にか娑婆をいでん
仏恩ふかくおもいつつつねに弥陀を念ずべし

我が国の浄土教の高僧、源信僧都は、世間からは小釈迦と讃えられたが御自身は「聖道の修行は利智精進の人はいまだ難しとはすまいが、予が如き頑魯（がんろ）（かたくなでおろか）の者がどうして実践し得ようか」と告白されて、「往生浄土の教えこそ、濁世末代の者の目であり足である」と随喜して、「極悪深重の衆生は他の方便さらになし、ひとえに仏の御名を称えて浄土を願え」とも、また「煩悩に眼障えられて摂取の光明を見たてまつらずといえども、大悲ものうきことなくして常に我身を照らし給う」と渇仰せられている。

本師源信ねんごろに　一代仏教のそのなかに
念仏一門ひらきてぞ　濁世末代おしえける。

元祖法然上人また「十悪、愚痴の法然房」と常に名告られつつ「専ら念仏を修め」て、世論紛々の中にも、わが国に浄土の一門を開き、一切大衆に念仏の光明を手渡して下さった。

智慧光のちからより　本師源空あらわれて
浄土真宗をひらきつつ　選択本願のべたまう。

親鸞聖人また「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」とも「愚禿の心は内は愚にして外は賢なり」とも名告られて、ひたすら本願に乗托して、肉食妻帯の姿のなりに無戒名字（戒律も保たず名ばかり）の比丘としての生涯を終えられた。

五濁悪世の衆生の　選択本願信ずれば
不可称・不可説・不可思議の功徳は行者の身にみてり

以上、七高祖ならびに親鸞聖人が、聖道の修行を真剣にせられた上に、我身の及び難いことを自照して、そこに、その者のために開かれた浄土の一門をたどっていられるお姿を仰いで、浄土往生という道が如何に我等凡夫にとって重大な教であるかをいよいよ知らされる。

すくなくとも人生に一つの大きな理想を持ってそれに精進した人々にとっては、この高僧方のたどられた道は、唯一の灯炬（ともしび）となって下さるのである。若しこのお教えが無ければ、大きく厚く堅い壁にぶっつかったまま悶絶するか、僅かな目前の欲求満足に溺れて空しく人生を終らねばならないであろう。

誓願の不思議

①弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いたつこころのおこるときすなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

我々が生れ出て、目も見えず物も言えず、ただ泣くことしか知らなかったのに、父を呼び母を慕い、匍い出し立ち上り、学校に通い世に出て、やがて独り立ち出来るのも、昼夜に憶念して、護りはぐくむ親の念力あればこそであるが、我々が浄土をねがい、本願を信じて念仏申されるようになるのも、そのこころがおこるや否や、大いなるみこころに摂め取って飽くまでもお見捨てのないみめぐみにあずかるのもひとえに弥陀仏のお誓いの不思議な願力によるのである。

古来、我々が仏法にあう喜びを「盲亀の浮木にあうが如し」と譬えられる。はてしなく広い海で盲の亀がたまたま浮木にめぐりあうということはまれなことであるが、我等凡夫の煩悩の雲におおわれて、真実を見る智慧のない身には、永遠の流浪がその定めである。それを真実の救いの浮木にあえるのは、この煩悩に障えられて求めるすべも知らぬ身をかねてから慈念して、あらゆる救いのみ手をさしのべて下さったお蔭である。

法華経の「長者窮子の比喩」はこの有様を如実に教えられる。「親を捨てて街に飛び出して落ちぶれはてた長者の子が、すでに親の家も親の顔さえも忘れきって、身も心もいじけすさんでさすらうておるのに、目ざとく親がそれを見出し、種々と方便して長年月かかって心を調えたのちに親類縁者を招いて、親子の名告りをあげ、親のもつ一切の財宝を子に譲るのである。子は狂喜して謝すべき言葉も見出せぬ」とある。

我々はこうした真実者、仏陀のましますことも知らず、唯おのれの智慧才覚をたのんで、窮子同様のさすらいを続け、おのれと造る罪業に縛られて孤独の旅のあけくれである。仏智はよくこれをしろしめし、やむにやまれぬみ心から、かかる我等を迎えようと光明あふれ、塵ほどの濁りも浄化しつくされる仏国土を建立し、更にあらゆる善きたくみをめぐらして、信じ願わずにおられぬ身にさして下さるその広大無辺の仏の御真実が徹って、ああ有難い、南無阿弥陀仏と称えようと思い立つがはやいか、摂めとってお見捨てのないみめぐみにあずかり、最早仏道において退転することのない身にさだめて下さる。これみな、我等の苦悩をわが苦悩とし、我等の喜びをわがよろこびとして、我等とひとつ身になって救い遂げずばやまじとお誓い下さる御本願の不思議な御力によるのである。

摂取不捨の恵み

私の友の一人は、少年の頃母を亡くし、他人の手に育てられたが、ほかの子は日が暮れると喜び勇んで我家に帰るのに、母の無い悲しさには何時も世話になる人の顔色ばかり気にかかって、安んずる日もなかった。ところが鹿児島の七高に入学し、仏教青年会に入り、歎異鈔を読むと、ほかは何も解らなかったが、唯一句「摂取不捨」の四字が心をうって「おさめとって捨てない」とは、これこそ真実の親であると慶喜して、それからというものは歎異鈔を肌身離さずに味わい続けるようになったと聞く。

さてこの四字をよく味わうとき、世間一般では何かよい所を見ては、さあおいでと摂取の手をのべるが、悪い所が見えはじめると、やがて捨て去るのが、私を含めて我々社会が皆そうである。それなのに、一度おさめとると、どうあろうと、どこどこまでも見捨てない、とは、地上の何処にも聞くことも、見ることも出来ぬ活きた御真実心である我々はこうした全理解者にあってはじめて、心から安心しておのがあるべきようにあることが出来る。友の一人はそのひかりをこの四字に感得して、自然に念仏の人となった

聖人は教行信証に「摂取不捨の故に正定聚（まさしく浄土に生れるに定まった人々）に住す」と述べられている。嗚呼、摂取不捨なるかな、その文字僅かに四字ではあるが地上にまたとない、そしてそれなくしては一切がばらばらになり、帰すべきところも、たよるべき所も無くなる、我々になくてはならぬ如来の実語である。

末　完

聞くことのむずかしさ

大学生の講義の聞きかたもいい加減なものである。古い調査だがミシガン州大学で一九四八—五一年にくわしい科学的調査をしたところ、学生の大部分は講義の五〇％しか聞き取っていなかった。できのよい学生でも平均理解率が七〇％を越えなかったという。日本の今の大学生や成人はどうだろう。云々。

早のみこみ、うのみ、聞きながしなどの例が青年にも多い。柳田国男先生はこのことを憂え、日本民主化のために聞くことの教育振興に余生をささげたいと云われた。残念ながら先生の遺志は逆コースに会って、生かされないままである。

（朝日、四月十九日夕刊。倉沢栄吉氏述。）

ゲーテの言葉

「雀を退治するにはどうしたらいいでしょう」と園丁がいった。「そのうえ毛虫や、甲虫の類や、もぐらや、地蛍やスズメ蜂や、うじ虫や。そういう悪魔の一族を退治するには？」と。「なあに、みんなほっておくさ、たがいに食い合って滅びるだろう」

あとがき

五月の子供の日に、二ケ月振りに一道会の例会を開き、「真実の満足」という題で最近の所感をのべました。それは、病気になれば治したい一杯であるゆる努力をしますけれど、よくなれるとばかりは参りません。しかし一人のこらずよくなれぬという破目におそかれはやかれ必ずおちますが、そこは余りにも暗く、あまりにも淋しく、正視するにしのびません。そこでよくなれる方面に溺れる者が藁をも摑む思いで、しがみついて、何とかこれでよくなれる大丈夫だというところで満足し安心しようと藻掻きますけれど、その道には黒い影がいつもつきまとうてはなれません。その行く先には墓場、しかも自分の墓場が待っているだけなんです。

この人間のあらゆる努力がむなしい、どんな光をもってしてもその光がかき消されてしまう暗黒、これをこそ仏はかねてしろしめして、ことに悲憐して下さる。しかもそれは外からでなく、苦しいつらい淋しいより外ない私と一つ身になって、内からお念仏となって浮び出て下さるたのもしさをいよいよ仰がせて頂きます。このよくなれぬ側に立って、無碍の光を放って下さるお方を知らされて、そこに真実の満足があり・ここに安心せしめられれば「本立てば末おのずから通る」道理で自然に他の問題も解消して行くのであります。大切なことは一切の手がとどかない、よくなれないところをお見抜き下さる大悲のまことをよく聞かせて頂くことであります。

世界広しと雖も、このよくなれぬところを憐んで、そこを救い遂げて下さる教は弥陀の本願以外にありません。このことは、死なない人はともかく、五十年百年の人生と限られた身には病人も医師も、看護人も見舞客も、はた若きも老いたるも、このこと一つはよく聞きひらかねばなりません。そのことをあとまわしにすることは、底のない槽に水を汲み入れながら、一向に満水しないと歎息するに等しいことでありましょう。

さて今回、故麻生介先生の著書(絶版)を奥様からお借り出来て、御法味を頂きました。又、吉田延世様の求道会館での聞書の断片を頂き、千葉崇憲様から、最近の法味も頒けて下さいました。

○

この原稿を入院の直前に書きました。しばらく静かに療養させて頂きます。お手紙のおかえしも失礼申すことでありましょうが御賢察下さいませ。

五月十日　花田正夫

追記

さいわいに手術もせずに、電気の焼灼だけですみまして退院いたしました。これからは時々病院に通って治療をうけることになりました。法話会などもしばらく休んで静養させて頂きます。

病気につきまして、一方ならぬ御心配を皆様からいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

六月一日

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
慈光第二十巻第六号　昭和四十三年六月十五日発行（毎月一回十五日発行）